

## 休 養

疲勞は、幼児保育者にとつて何よりの禁もつである。しかも、そと目には氣らくそうに見える保育が、身をも心をも疲勞させることは甚しい。あの元氣な幼児たちと、馳けまわつては、いつしよに遊んでゐることは、若い人々にとつても容易のことでない。更に、あの寸時も心を離れない幼児たちの動きに、一々氣をくばつてゐることは、老練の人々としても油斷をゆるされない。それに、ベルが鳴つて休憩時間が來て、職員室で小憩出來る學校の先生とちがつて、つゞけつゞつしよで、よく嚙んでゐるひまさえない。その上幼児が歸つてからも、その日の整理、あすの準備、それがもとより毎日の連続である。疲れたとさえ思つてゐる暇のない程に疲れが積る。

それなのに、疲勞ほど、保育の仕事を妨げるものはない。

第一、子どもの活潑な活動に伴つてゆけない。保育技巧で何とか相手をしてゐるとしても、その鈍さは、どの位、子ども達に不満足な思ひをさせてゐるか分らない。のろ呉い足どりや、うつろな目つきや、響いて來ない返事や、すべてに彈力

がない。彈力のない先生は、彈力のないゴムまりと同じに、子ども達を喜ばせることはできない。幼児の活動に伴えない位で、彼等の生活の中に、保育の活きた機會が見つけ出される筈はない。あとからさえ、氣がつかないかも知れない。

幼児にけがをさせるのも、先生の疲れてゐる目である。それは、電車や汽車の故障が、運轉手の疲れてゐる日に起りがちなと同じである。疲勞は生活々動の反應をおそくする。あつと思つてゐる間に、汽車はてんぶくし、子どもはけがをして仕舞う。あつとも思わぬ時さえあろう。

わたしは、幼稚園の先生方に、夜の睡眠を充分して貰うように、いつもすゝめる。子ども達に取り囲まれて居ねむりをする人は、まさかあるまいが、ゆうべの寝不足は、翌日を半もうろうとさせる。もうろうとして、幼児の想像の世界にふら／＼するのは、まだいゝ。睡眠不足から氣分がいら／＼して、お小言が多くなつたりしたら、子どもは迷惑千萬である。あの先生は、どうしてあんなに、不機嫌だつたり、氣みじかだつたりするのか知ら、何か人生問題に煩もんでいら

れるのかと、同僚までハラ／＼していると、それは、ゆうべの夜ふがしに、しかもくだらない宵つばりの結果に過ぎなかつたりする、煩もんさせられるのは、氣の毒な幼児たちである。

適度な睡眠は一番手軽で、そうして最も健康な休養法である。が、若い人々は、そんな消極的休養だけでは済むまい。そこに、積極的休養法としてのいろ／＼の娯樂もあるう。それは、その人の好みと便宜と可能とに任せる。たゞ怠つてならぬことは、忙しければ忙しいほど、又、職務を大切と思えば思う程、休養を必須なる課目(?)として、規則正しく生活のプログラムの中へ組み込んでおくことである。つまり、休養に對する積極性と計畫性を忘れぬことである。積極的ならば、ぐす／＼娯樂にもなるまいし、計畫的ならば、だらしない娯樂にもなるまい。休養はいうまでもなく働くための休養である。娯樂のための娯樂は、休養の部にはいらない。

レクリエーションといふ言葉はいゝ言葉である。この頃大はやりで、時には、随分濫用の感を起させることもあり、殊に、敗戦國の再建生活につりあいのとれないような氣のすることもあるが、しかし、レクリエーションという言葉は、ほんとうにいゝ言葉である。働けば力は消もうする。それをとりかえずの、レ(再)クリエーション(創造)である。聞いただけでも、生きかえるような氣もちのする言葉である。むつかしくいへば、生命の合理的要求であり、又、生活の合

理的必須である。筋肉勞働にその必要はいうまでもない。事務勤勞にその必要はいうまでもない。そうして、その當然の考慮が、現代的生活の合理性の一つとして、注意深く行われている。が、我田引水ではないが、教育、すなわち、育つ生命を相手とする生命そのものの仕事のためには、一層多く、その必要があり、考慮が拂われるべきことである。わたしは、日々に生命で仕事を。生命を以て生命を育てつづけている者である。その生命が消もうしたら、相手の生命を育てることがどうして出来よう。自分のために必要な生命だけでなく、わかち與えなければならぬ生命である。惜みなくわかち與えると共に、否、思いきつてわかち與えることの出来るために、たえず、活き／＼した生命を、レクリエートしなければならぬ。

勿論、人間の貴い生命は、休養などという方法よりもつと貴い生命の本源の力づけによつて、精神的にレクリエートされるものであらう。しかし、わたしは今、そうした高いこと深いこと重いことを敢ていわない。もつと低く淺く輕いところで、友よ、よく眠り給え、よく休み給え、計畫的に樂しみの友だちに、そうした機會を得られ次第、否々、そうした機會を賢くつくり出して、よき休養を忘れ給うなという。それは君が自分でレクリエートして呉れなければ、思いきりいつしよに働けないからでもある。——必ずしも悪友の言葉ではあるまじ。